２－７

主題	認知症を抱えた入居者の尊厳を守った排便コントロール（一事例）
副題	気持ちに寄り添ったケアをするためには

キーワード１　排便	キーワード２　尊厳	研究(実践)期間	８ヶ月

法 人 名	社会福祉法人　練馬区社会福祉事業団
事業所名	上石神井特別養護老人ホーム
発表者（職種）	伏見明日香（介護士）
共同研究(実践)者	渡邊直子（看護師）

電　話	０３-５９０３-３０５１	ＦＡＸ	０３-５９０３-３０５２

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成２５年開設の全室個室のユニット型特別養護老人ホーム施設で、特養３０床、ショートステイ６床の全４ユニットで構成されています。 既存の視点に捉われないようにと若い介護職員が多いですが、看護師はベテランの常勤職員のみで構成されており、職種を超えて日々協力し合っています。

《１．研究(実践)前の状況と課題》

当ホームでは、便秘が続いた場合の排便サポートとして、下剤・坐薬・浣腸等の対応をしていた。だが中にはその対応を嫌がる入居者もいるため、どのような排便コントロールが望ましいのか大きな課題としている。

事例：Ｈ様　男性、８７歳、脳血管性認知症、脳梗塞後遺症、高血圧症の既往歴あり。当ホームに入居される前の施設では、転倒や尻もちを繰り返し腰椎圧迫骨折の既往歴もある。日中は本人のリズムに合わせてトイレに行かれているが、自然排便は見られず、日常的に下剤を服用している。下剤の効きがなければ坐薬を使用する。ある日、いつものように排便が見られない日が続いたため、看護師と相談し坐薬を使用したところ、普段温厚なＨ様が大声で怒鳴り、怒ってしまわれた。数日前のことも忘れてしまうことが多いＨ様だが、その時のことはよく覚えており、それを機に坐薬を強く拒否するようになる。

《２．研究(実践)の目的ならびに仮説》

当ホームでは､「一人ひとりの人生を尊重して暮らす」を理念の一つとして掲げている。排せつケアは羞恥心や自尊心に配慮が必要なケアである。私たちは尊厳を尊重したケアを実現させるためにも､「自然に排せつする」ことを第一の目標として取り組むことにした。Ｈ様に合った排便リズムのサポートにより、便秘が原因で起きていた食欲不振の改善や夜間の不眠によるベッドからの滑落を防げる可能性がある。日常的に行なわれている排せつケアが、尊厳を尊重した排せつケアに変わることにより、今まで以上に豊かな暮らしへ繋がることを目的とした。

《３．具体的な取り組みの内容》

排便コントロールの有効的な手段として、下剤や坐薬を使用していたが、坐薬の使用を嫌がるＨ様の気持ちを看護師に伝えることがきっかけとなり、Ｈ様を個別にアセスメントしていくこととなった。服用している薬、食事、

無断転載・複製を禁じます。

活動量等様々なことが原因で便秘が起こっていることを再認識し、介護士・看護師・栄養士が協力して取り組むこととなる。

１、　下剤の検討

坐薬の使用を減らすため、看護師と相談し、下剤の種類・量を検討する。

２、　食品でのアプローチ

・水分摂取量を確保する工夫として、お茶をゼリー状にしたものを提供する。

・腸内細菌を整える効果のあるオリゴ糖の提供。乳酸菌を一緒に摂ると効果的だというアドバイスのもと、好きな味の乳酸菌飲料を飲んでいただき日課となっている。

３、　アクティビティの充実を検討

活動量が少ないため機能訓練指導員と協力し、アクティビティの内容を検討した。

《4，取り組みの結果》

入居時から変わっていなかった下剤を改めて検討することで、今のＨ様に合った下剤を服用していただけるようになった。

オリゴ糖は、下剤のようにすぐに効果は見られないが長期的に評価していくことで、少しずつ自然排便の回数が増えていることがわかった。

体操等、気軽に身体を動かすことが出来るアクティビティを勧めたが、「私はいいです」と参加していただけないことが多かったため、今後も課題として残っている。

下剤の効きがなければ、坐薬を使用すると決めていたが、食事摂取量や活動量は日によって差があることが分かり、Ｈ様から便意の訴えがあることもあれば、「出そうもないですね」と仰っていたことにも気づいた。

そこで、決められた日数にこだわらず、食事摂取状況の把握や、日々の様子、訴えなどに耳を傾けることを心掛けたことで、その時々に合った対応を臨機応変に考えていくことが可能となり、必要以上の坐薬の使用を減らすことに繋がった。

《5．考察、まとめ》

便秘から起きる食欲不振や排便がスムーズではない違和感から起きる車いすからの転落事故、不眠等によるベッドからの滑落による怪我など、様々な面で影響を及ばしている。

Ｈ様のために、「排便が出れば楽になるから」との想いで坐薬の使用という選択を取っていたが、Ｈ様の言動も含めて振り返ると、そこにＨ様の気持ちへの配慮が欠けていたように思えた。

今回の事例に関するアセスメントでは、認知症を抱えている方に対しては、言葉や態度だけではなく、表面では見えない気持ちの部分にも目を向けなければならないのだと反省する機会となった。

「自然に排せつすること」を目標に今後もケアを考えていくが、排せつとは身体的にも精神的にも大きく影響を及ぼしていくものだと再認識し、より一層気持ちに寄り添ったケアをしていけるよう努めていきたい。

《6．倫理的配慮に関する事項》

本実践発表を行うにあたり、ご本人と家族に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

よくわかる排泄障害に強くなる!コンチネンスケア 12 の疑問(其ノ8)排便のコンチネンスケア　排便障害のアセスメント

神山剛一　著

《8．提案と発信》

今回の実践を経て、改めて「個別ケア」がいかに重要かを学ぶきっかけとなった。

入居者と時間をかけて向き合い、小さな変化に気づくこと、じっくりと話を聴くことで得た情報を入居者一人ひとりの暮らしに反映させていくことを改めて決意した。

無断転載・複製を禁じます。